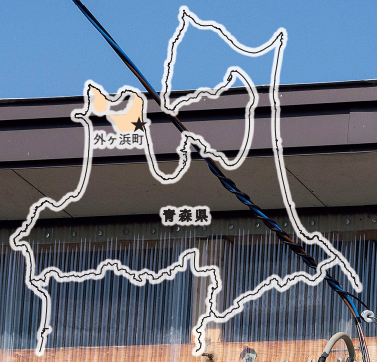
向かい風を突き抜けろ！

青森県津軽半島にある外ヶ浜町は、ホタテの養殖が盛んなまち。しかし高齢化率は51％で、人口減少も進むばかりだ。逆風だらけの土地で、それを正面から受け止め、「負けるもんか」と突き進む漁師がいる。高森優（ゆたか）さんだ。緻密なデータ蓄積から絶品のホタテを育てる熱い漁師の生き様をたどってみたい。



高森家。左から長男の大嘉（だいか）くん（15）、優さん（44）、次男の就将（なりまさ）くん（13）、美穂さん（44）。

蟹田港。湾の奥に八甲田山を望む。

蟹田の対岸は下北半島の断崖絶壁だ。

蟹田港。ホタテ養殖の漁家が並ぶ。

「東は奥州外浜、西は鎮西鬼界島」これは「日本の端から端まで」を意味する中世の慣用句である。当時日本の最果てとみなされていた陸奥の国でも端の端、異界との境とされていた。それが「外ヶ浜」という言葉の歴史である。その名に由来する外ヶ浜町蟹田に高森優さん(44)は住んでいる。

外ヶ浜町は陸奥湾のちょうど出口にあたり辺鄙な場所ではあるが、蝦夷地と呼ばれた北海道と最短距離にあり、津軽海峡を行き来する漁民と交易船の拠点であった。豊かな水産資源が地域の歴史をつくってきたのだ。

しかし現在の外ヶ浜町の人口は約6000人。最盛期の3分の1まで減ってしまった上に、高齢化率は51%。過疎高齢化が進む青森県でもワースト2位の数字である。かつてのような漁業資源ももはやなく、衰退としか言い様のない現実がそこにある。

そんな外ヶ浜町蟹田で、目いっぱい日焼けしながら漁業に励み、情報発信に取り組むのが高森優さんである。朝2時半に起きて3時に出港。ホタテの水揚げ、出荷、網の修理と休みなく働いてさらに毎日10キロ、ランニングしているという。とんでもないバイタリティをもった漁師だ。

漁師の世界を変えてやる！

優さんが社会に出たのは、バブル崩壊後の1999年。北海道拓殖銀行、山一證券と経営破綻が相次ぎ、日本が未曾有の金融危機に直面していた時代である。「この先何が起こるかわからない。ならば、東京で自分の実力を試してみたい」。函館の大学を出たあと東京の不動産会社に就職する。そこは、今でいうブラック企業だったが、むしろ自分を鍛えることができると前向きに考えた。

毎日鬼のように飛び込み営業を課せられ、成績が上がらなければ上司から分厚い本や灰皿が飛んでくる。100人入社した同期も、翌年には10人しか残らない…。そんな日々の中、疲れた時に思い出すのは、幼い時に見た故郷・蟹田の浜の風景だったという。ふと、思った。「東京でこれだけ頑張れるんだったら、地元で漁師になってもすごいことができるんじゃないか」と。

数々の修羅場をくぐってきた自分に自信もあった。「飛び込み営業で鍛えられていたし、世の中にはいろんな価値観があることを学んで、視野も広がった。田舎はすき間がいっぱいあるから、東京と同じように頑張れば、あっという間に這い上がれると思っていたんです」。

高森優さん。

朝5時にホタテ水揚げをする優さん。

異常高水温を乗り越える

高森家では父親の邦三さん(76)の代からホタテ養殖を手がけるようになったが、長男の優さんに「継いでほしい」と言ったことは一度もない。東京から帰ってきて「漁師になる」と宣言した時も「やめたほうがいい」と反対したほどだ。水産資源が減り魚はとれず、ホタテも養殖中に大量死するなど苦労が絶えなかった。